慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴木鴻一郎編 帝国主義研究
Sub Title	
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.1 (1965. 1) ,p.78(78)- 79(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19650101-0078
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650101-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。そして、株式会社の普及と合同運動、金融市場の変化などの叙述を通じて、「大不況」の意義を追究し（第三章）、イギリスを中心とする「大不況」は「重要産業企業の株式資本としての商品化を準備することによって、イギリスをはじめアメリカ、ドイツに金融資本の形態的完成をもたらす具体的契機」となり、「さらに金融資本の現実的運動過程における、それら諸国の特殊な様相と地位を決定した」（一一六頁）と意義づけている。第二部では、イギリス綿業を中心とする産業資本主義段階が、綿業の発展、鉄道の発達と国際資本市場の発展、イギリス鉄鋼業の躍進、といった順序で準備的考察が行われた（第一章）後に、「大不況」期とそのもとでの株式形態の普及および海外投資の変化などが取扱われる（第二章）。ここでも、「大不況」の原因を後進抬頭国のイギリスにたいする反作用に求めることは困難で、「原因はイギリス自身の内部的要因にこそ求められねばならない」（一六九頁）とされ、「イギリス『大不況』は、好況過程における国際資本市場の重要性の増大、利子率上昇にたいする阻害的傾向、中小資本の執拗な残存性、そして固定資本更新にたいする困難という、総じて産業資本段階の自立的蓄積を根本的に変更するような資本蓄積の一般的傾向によってもたらされた景気循環の変形、すなわち産業の停滞性にほかならなかった」（二〇一頁）とされている。そして、第三章（産業における資本市場の確立と金融資本）では、この「大不況」の解消過程での、イギリス国内資本市場の成立と合同運動が考察され「流動的資本市場の成立こそ、『大不況』期に提起された固定資本の流動化を達成し、新たな発展内容をもった資本蓄積を実現する株式資本の成立、すなわち金融資本の確立を意味する」（二二〇頁）とされる。以上のようなイギリスを中心とする金融資本の成立についての考察をうけて、第三部では、アメリカにおける金融資本の形成が、鉄道及び鉄鋼業の発展を基軸とした資本集中、支配集中のなかでの工業証券市場の成立によって行われ、この金融資本の成立が「アメリカの資本主義的産業の全構造を決定的に変容させるという結果をもたらした」（四〇六頁）として総括される。第四部では、ドイツ金融資本成立の前提としての「大不況」、不況カルテルなどが考察された後に、好況カルテルと混合企業の生成がルール炭鉄業について叙述され、資本市場とベルリン大銀行との関係などが明らかにされ、ドイツ金融資本の発展が重化学工業における寡占体制、資本市

場と証券代置の叙述の中で示されている。ここでは、自己金融的傾向が比較的顕著にみられた化学工業、コンツェルン内部金融の電機工業などの指摘があり、これらの部門では、ベルリン大銀行も「炭鉄業におけるほどの決定的役割を果さなくなった」（五〇〇頁）とされる。

以上簡単に紹介したように、本書は、一九世紀七〇年代から二〇世紀初頭にかけてのイギリスを中心とした世界資本主義の変容過程を、金融資本の成立・展開としてとらえようとした「帝国主義研究」である。ここでの金融資本の概念、背後にある「原理論の新たな体系」（はしがき）については必ずしも直ちに賛同し難いが、とにかく、ふんだんに事実をもりこんだ力作であるばかりでなく、新たな理論的問題提起を含んだ実証的研究である。それだけに、読者としては、編者が「はしがき」の程度にとどまらず、本書全体が提起している理論的諸問題を整理・総括して従来の見解との対比において、それを示されたならば、各論文がそれを実証するといった構成となって、もっとずっと読み易いものとなったであろうと思われる。しかし、実はそれこそ汲みとるべきものとして読者に課せられた課題なのかも知れない。

（日本評論社・A5・五一一頁・二二〇〇円）

―常盤　政治―

＊　＊　＊

玉野井芳郎編著

『大恐慌の研究――一九二〇年代アメリカ経済の繁栄とその崩壊』

「本書は、その副題の示すように、一九二九～三三年の大恐慌の解明を目標に、アメリカ資本主義における二〇年代の繁栄とその崩壊のプロセスを考察したもの」（はしがき）で、編別構成及び執筆分担は次のごとくである。I序論（玉野井芳郎・春田素夫）、II株式会社の構造的背景と大恐慌の諸要因（吉富勝）、III金融政策と商業銀行（平田喜彦）、IV景気変動と国際収支（志築徹朗）、V自動車産業（伊藤誠）、VI建築活動（中野安）、VII鉄鋼業（伊藤誠）、VIII農業（伊藤誠）、IX電力事業および公益事業の投資活動（鬼塚雄亜）。なお、農業の付論として中小企業（伊藤）が、補論Iとして「長期趨勢――趨勢のパターンと波動――」（公文俊平・竹内靖雄）、補論IIとして「エネルギー構造の変化――一九二〇年代における技術革新の一側面――」（鬼塚）が論じられている。このような編別構成から明らかなように、大恐慌を総括的に、つまり一九二〇年代の好況過程とその大恐慌への転換の過程を、主要部門の豊富な資料にしたがって多面的に追跡したものである。

この研究をはじめるにあたっての、編者の問題意識は、「民間粗投資が九〇％以上も減じるような落ち込みを示した大恐慌における、史上空前の深い景気下降がどうして生じたかについてのその秘密を明らかにすること」、及び「大恐慌をエポックとして、世界の資本主義経済に大きな変化が種々の面でみとめられるが、そのような大恐慌を資本主義の発展の歴史のうえでどのように位置づけるべきか」ということであった。このような問題意識のもとに、前述のような編別構成をもって分析がすすめられる。各編の分析はそれぞれ多岐に亘っていて、これらを一括して要約することは困難であるが、編別構成全体を通じて貫かれている視点は、「二〇年代のアメリカ資本主義を中心とする国際的な資金の網、すなわちアメリカ資本がドイツに輸出され、それがドイツの賠償支払をとおしてイギリス・フランスに流れ、さらに、両国の戦債償還の形でアメリカに還流するというルートと、アメリカとフランスの短期資金が、イギリスを介して後進農業諸国へと流れこむとい